

書評

篠崎英夫 著

精神保健学/序説

樋口輝彦

著者は昭和 41 年に慶應義塾大学医学部を卒業されたので、小生より 5 年ほど先輩になる。大学は異なるが、精神医学、医療の分野でほぼ同時代を過ごしてきた小生にとっては、著者の足跡を追うことは自らの歩んだ道と重ね合わせる、あるいは照らし合わせることができる。個人的には私にとって、このような意味があり、大変興味深く本書を読ませていただいた。しかし、本書はそのような個人レベルの関心を越えた日本の精神科医療、医療行政を考える上で重要かつ貴重な意味を持っている。

著者は、ご承知のように、公僕としての仕事の大半を精神保健医療福祉行政に注がれた。1970 年代から 2002 年までの 30 余年間、行政の立場で一貫してこの領域をリードされたが、この 30 余年間は戦後日本の精神保健・医療行政の大きな変革期であり、重要な施策、法律が生まれた時代であったことを考え合わせると、まさにわが国の精神保健・医療行政変革の中心人物と言っても過言でなからう。この著書の第 6 章「戦後医療のエポックと医療行政」は戦後の精神保健医療行政の推移が粕川氏(医学出版社の編集者)と著者の対談としてまとめられているが、当時実際に行政を担当されたご本人の解説だけに、臨場感が伝わってくる。著者は障害保健福祉部長時代に「精神保健福祉士法」の成立にかかわり、精神保健福祉士の国家資格化を実現させ、健康局長時代には「健康日本 21」の策定にかかわり、その後医政局長時代には「新医師臨床研修制度」の準備に取り組まれたが、第 6 章では当時のいきさつが詳しく述べられており、単なる歴史的資料の解説とは一味違う内容である。

本書の構成は 6 章から成る。第 1 章「精神医学と医療の歩み」では近代精神医学の発展として身体論の系譜、心理学的精神論の系譜の代表的な学者の紹介を軸に発展の歴史をたどるとともに、治療法の変遷に言及している。第 2 章「日本の精神保健と

精神医療の歩み」は第二次大戦後から今日に至るこの領域の足跡をたどっているが、行政の専門家だけあって、その足跡が関連する法律の制定、改正を時系列的に取り上げ解説されている点が特徴である。

また、この章の後半は「精神保健と精神医療の現況」として最新のデータを交えて解説されている。この章の最後に「これからの精神保健医療はいかにあるべきか」がまとめられているが、これは著者の長年の行政のキャリアから将来を展望したものであり、関係者にとって将来を考える上で重要な視点を含んでいる。第 3 章「日本人の精神保健の危機」では、昨今社会問題としても注目されており、精神保健上代表的な課題でもある「日本人の自殺」、「アルコール依存症」、「タバコへの依存」が取り上げられている。第 4 章は超高齢社会を迎えたわが国においては、最も関心の高い「認知症」が取り上げられている。この章の前半は岸川先生(認知症が専門)と著者の対談の形で認知症に関する医学、社会、福祉すべての対策についての現状分析と課題の整理が行われている。

第 5 章「精神障がい者の人権を考える」では著者の恩師である故大谷元厚生省医務局長が生涯をかけ取り組まれた「スティグマとの闘い」を引用し、この恩師の意志を引き継ぎ障害者の人権と差別の解消のために努力した経緯が記されている。第 6 章については、先に紹介した。

精神保健に関する著作は他にもあるが、本書は厚労行政、なかでも精神保健医療福祉行政の領域で長く中心的な役割を果たされた行政官の立場からまとめられており、他に類のない貴重な書籍であると思われる。

(国立精神・神経医療研究センター名誉理事長)

●四六判 320 頁 2017 年 5 月 定価：本体 3,000 円+税 へるす出版刊